

高機能広汎性発達障害児の描画特徴に関する一研究

— バウムテストを用いて —

廣 澤 愛 子 (愛知教育大学教育臨床学講座)

大 山 卓 (愛知教育大学実践総合センター研究協力員)

(2006年10月31日受理)

A Study of character in the Baum Test drawn by children with High-functioning Pervasive Developmental Disorder

Aiko HIROSAWA (Department of Clinical, psychological and Practical in Education, Aichi University of Education)

Takashi OHYAMA (Assistant staff of Center for Research, Training and Guidance in Education Practice, Aichi University of Education)

要約 昨今、自閉症の人には認知障害があるという説が支持されている。そこで本研究では、自閉症の中でも特に高機能広汎性発達障害の子どもの認知特徴を調べるために、彼らが描いたバウムテストの分析を試みた。その結果、①部分認知が優位であり、②「部分」という部品を組み立てて「全体」を作るという認知スタイルで木を描くため、全体像がアンバランスで木に見えにくい、③その一方で、現実離れたファンタジックで自己肥大的な木もよく描かれる、という結果が得られた。①と②については概ね先行研究の結果を支持するものであるが、③については、「部分認知の優位性」や「部分の総和を全体像とするという認知スタイル」からは説明できない現象である。したがってこの点については、高機能広汎性発達障害児の障害特性及び個々の子どものより詳しい発達の様相を考慮しながら、今後さらに検討していく必要がある。

Keywords : 高機能広汎性発達障害, 認知特徴, バウムテスト

I. はじめに

近年、自閉症に関する研究及び臨床はますますさかんに行われているが、その中でも特に、高機能広汎性発達障害に関する注目が年々高まってきている。筆者らは、小児科・心療内科クリニックや大学の心理教育相談室で、不登校をはじめとした心理的問題を抱えた子どもの心理療法を行っている。大学の心理教育相談室に来る子どものうちの約4割が発達障害であり、さらに、発達障害の子どものうちの約8割が高機能広汎性発達障害と診断されている。したがって、彼らへの心理的援助を行う際、発達障害への理解や支援が欠かせないものとなっている。本研究では、発達障害の中でも特に高機能広汎性発達障害に焦点を当て、高機能広汎性発達障害の子どもの内界を理解するための一助として、彼らが描いたバウムテストの特徴を分析し、考察したい。

II. 問題意識

「I. はじめに」においても述べたように、筆者らは日々の臨床の中で、高機能広汎性発達障害があり、二次的に心理的問題を引き起こしている子どもの心理的援助を行っている。そしてその中で、彼らひとりひとりの内界を理解し、それに基づいた個別的な心理的援助を行うために、バウムテストや自由画、風景構成法などを用いてきた。言うまでもないことだが、同じ高機能広汎性発達障害の子どもでも、ひとりひとり

のパーソナリティによってその在りかたは異なる(Alvarez,1999)。したがって、その個別性に合わせて、心理的援助の在りかたもおのずと少しずつ違ってくる。

しかし一方で、筆者らは、彼らの描いた絵に数多く接するうちに、そこに何かしら共通した「独特の雰囲気」を感じ始めるようになった。特にバウムテストでは、その描かれた「木」は「木」ではあるものの、我々が知っている「木」とは何か違っている印象を受けることが多かった。一つ一つの部分を見れば確かに幹であり、枝であり、葉であるのだが、全体を通して眺めるとやはり「木」に見えない描画が数多く見られた。「木を見て森を見ず」という言葉があるが、そのような印象を抱くこともしばしばであった。そして、高機能広汎性発達障害の子どもには何か独特の「外界への認知スタイル」があるのではないかと、そのような独特の認知スタイルがあるからこそ、彼らの描く「木」に筆者らは違和感を抱くのではないかと、との仮説に至ったのである。

そこで本研究では、このような仮説を、これまでの先行研究を参考にしながら検証し、高機能広汎性発達障害の子どもの外界への「認知スタイル」の特性を明らかにしたいと思う。高機能広汎性発達障害の子どもの内界—すなわち、彼らがどのように外界を認知しており、またその外界でどのように自己を確立しようとしているのか—を理解することは、ひいては彼らへの心理的援助にも有益な示唆をもたらすと考えている。

Ⅲ. 先行研究

(1) 自閉症についての先行研究

自閉症は、①社会性の障害、②コミュニケーションの障害、③想像力の障害とそれに基づく行動の障害、の三つが基本症状とされている (Wing, 1979)。しかし、自閉症についてこれまで様々な研究が行われてきているものの、その原因や成り立ちについてはいまだ解明されていない。ただし、脳神経科学の進歩に伴い、自閉症が脳や中枢神経系の器質的障害であることはほぼわかってきており (十一, 2001)、近い将来、自閉症について、脳の障害となる部位の特定や神経伝達物質の様子など医学的解明が進んでいくことが予測される。

一方、心理学の立場からも、自閉症についてさまざまな研究が進められてきた。いずれの理論も自閉症のすべてが説明できるわけではないが、昨今は、自閉症の中心的障害は認知障害であるという考えが広く支持されてきている。つまり認知の偏りのため、自閉症の人は周囲を独特のやり方でとらえている、という考え方である。自閉症が認知障害であるとする考えが主流となった背景には、知的な遅れのない自閉症の人が書いた手記の与えた影響が大きい。それまでわからなかった自閉症の人の内的世界や独自の感じ方や考え方を研究者が理解できるようになってきたのである。ニキ・リンコ (2005) はアスペルガー症候群と診断された日本人女性の翻訳家であるが、様々な自閉症特有の認知特徴を紹介している。その中で、明らかに自閉症の人には認知の偏りがあり、そのため周囲を独自の視点でとらえていることがわかってきた。自閉症の人に特有の物の見方や感じ方が明らかになることで、自閉症の研究は大きく前進し、自閉症に関する理解はより一層広がったと言える。

自閉症を認知障害という視点からとらえて説明している代表的な理論としては、「心の理論」(Baron-Cohen, 1985)、「中枢統合性理論」(Frith, 1989)、「実行(遂行)機能障害」(Russel, Ozonff, et.al 1991)などを挙げることができる。「心の理論」障害説は、相手の感じていること、考えていることを理解することに障害があるとする考え方である。「中枢性統合理論」障害説は、文脈に沿って情報処理を進めていく機能の障害であり、部分から全体を統合することが苦手であるとする考えである。また「実行(遂行)機能」障害説は、物事を順序立てて処理したり、注意を別の方に向けたりすることが困難であるという視点変換の障害であるとする考えである。これら自閉症特有の認知特徴を踏まえて、これまでに様々な自閉症療育・治療プログラムが実践されてきた。代表的なものとして、TEACCH (Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped Children) プログラム (Eric Schopler, 1972) や行動療法プログ

ラム (高田, 2003)、認知発達治療 (太田, 2003)、関係障害臨床 (小林, 2000) などがあげられる。最近では新たな療育・治療的なプログラムとして、社会技能訓練 (Social Skill Training; SST) や応用行動分析 (Applied Behavior Analysis; ABA) が自閉症療育・教育の場面で数多く実践されるようになってきている。社会技能訓練 (SST) はソーシャル・ストーリーやコミック会話など自閉症の認知特性を考慮した、社会性障害に対する心理教育的プログラムとして学校現場で多く実践されてきている (Carol Gray, 2005)。応用行動分析 (ABA) は、行動療法をベースに子ども主導の発達論的アプローチを取り入れた手法であり、治療教育場面で多く実践されてきている (Shira Richman, 2001)。また療育システムとして、アメリカでの最新の療育プログラム (交流型「対人・コミュニケーション・情動安定」支援モデル; サーツモデル) も広く紹介されつつある (十一, 2003)。

一方、自閉症は認知障害であるという見方が広まるなかで、精神分析的な観点から自閉症の人 (子ども) の心理療法を地道に行っている、英国タビストックの専門家たちは、自閉症を「間主観性の障害、他者の存在に対する認知の欠落」ととらえ、「人間関係についての情緒的基盤をもった関心ないし願望における障害である」と定式化している (Alvarez, 1999)。このような観点から自閉症を理解し、自閉症の人の対象関係の在りかたにアプローチしていくやりかたもまた有効であることが明らかとなっており (前掲書)、自閉症の人への心理的援助を考える際には、このような見方も必要だと感じられる。

(2) 自閉症の人の描画についての先行研究

自閉症の人の描画表現についてもさまざまな研究が行われているが、自閉症の人には、特定の領域について、知的水準からは予想できないような才能があらわれる人がいる。これをサバン症候群と言う。中根 (1999) は、音楽分野、絵画分野、描画、カレンダーなどの特定分野におけるこれらの才能を紹介し、その背景には認知の独特なスタイルや優れた短期記憶があると述べ、さらに、自閉症児は自分の考えを変えて別の視点から物事を見ることができず、他人の助言を受け入れることが不得手なため、独自の世界を展開していく、とも指摘している。自閉症の人すべてに突出した才能があるわけではないが、サバン症候群の中に自閉症の人が多いの、自閉症に共通する認知特性が関係している可能性もあるだろう。

また杉山 (1997) は、知的障害のある自閉症の青年の10年にわたる連続画に基づき、①過去の記憶の正確な保持や想起、自閉症児の周辺視野を好む傾向 (視野を半分以上さえぎって物を見たり、「横目」で物を見たりする) など自閉症独特の視線から絵を描いている様子、②ファンタジーへの没頭、③アニミズム傾向、

などの自閉症の人の描画特徴を挙げている。さらに杉山(2002)は、自閉症の人は一見して自閉症の人の作品とわかる、どこか無機質で細密な絵を描く人が多いと言い、これら自閉症の人の描画特徴を、注意を対象に向けたときに他の情報はすべて遮断されたり無視されたりする‘単焦点(single focus)’と呼ばれる「認知の過剰選択性」や「中枢統合障害理論」から説明し、自閉症的な認知は全体像の把握の困難さを引き起こす、と述べている。それ以外にも、自閉症の人は‘視覚で思考する人(visual thinker)’であり、見たそのものの認知にとらわれ全体的な概念として把握することの困難さがあることや、映像的記憶が優位なため、‘タイム・スリップ(time slip)’と言われる過去のできごとの突如な映像的フラッシュバックがあることも指摘している。

一方、寺山(2002)は自閉症の人の描画表現について縦断的研究と横断的研究を行い、①限られた対象への関心の強さ(同じ対象物の繰り返し)、②視覚記憶の特徴を反映した写実的な表現(視覚記憶の優位)、③独特な絵画表現(細部に注目し、全体を簡略化)、④イメージの合成・展開(話し言葉に困難さを示す自閉症児でもイメージを操作して表現。つまり映像による思考)、⑤感情の表出(言葉ではなく絵で感情を表現)などの特徴を指摘している。

また、近藤(2003)は、アスペルガー症候群と診断された児童一名の人物画表現を発達段階とともに考察し、①知的発達よりも3年程度の遅れた描画発達、②知的能力と人物画テストの成績の乖離(身体パーツの項目数や割合の問題)、③身体の一部を詳しく描く傾向、④描画全般における統合不全、非相称、部分の欠如、全体のバランスが悪い等の特徴(首や肩といった組み立ての欠如、身体パーツ間の相互作用的な関係づけの問題、プロポーションの誤り)、⑤描画に心理的付加を加えることが少ない傾向、などの特徴を指摘している。

さらに、自閉症の子どもの特異な描画発達について、浜谷・木原(1990)は、自閉症児は知覚そのものに障害があるというより、視覚的な入力を言語などに符号化して、抽象化した概念を形成することに障害があるとし、視覚的な形態をそのまま記憶し再生する描画傾向があると述べている。また、自閉症の子どもが描く「立体物図式」は年齢に比して巧みに描かれているのに対し、「人物図式」は幼稚な印象がある点を踏まえ、一方的に見て眺める恒常性のある対象物と実践的な関わりを持たなければならない人物との違いも説明している。そして松瀬(2002)は、人物画を拒否したり、苦手なものを描こうとしない自閉症児がいることを指摘し、慣れないものに不安を感じやすく、慣れたものへの注目傾向があると述べている。

自閉症の人のバウムテストについても、その描画特

徴を調べた研究が行われており(原・中西,2000,中鹿,2004)、枝の描画表現が多いことや左右の対称性表現、細部への注目傾向や部分の集まりとして処理する認知構造の存在、さらに、幹や枝の閉じた表現が多いことなどがその特徴として挙げられている。また部分を組み合わせた全体構成となっており、木全体を一度にイメージすることが難しく、「部分的な認知は良好であるが、全体的な状況を統合して捉えることが難しい」と、「中枢性統合障害」理論から指摘されている。

以上、自閉症及び自閉症の人の描画についての研究を概観してきた。これらの研究を踏まえつつ、本研究は以下のような位置付けで行う。

(3) 先行研究における本研究の位置付け

これまでの研究で明らかになっている自閉症の人の認知障害とは、平たく言えば、この世に生まれて目にする全てのものをどう認知するかという点が、自閉症ではない人と異なっているということの意味している。そして、多くの人が物や人を認知するやり方とは違ったやり方で世界を認知しているということは、自閉症の人には、世界が少し違って見えているということである。本研究においても、自閉症の人には認知障害があるという先行研究の結果を踏まえ、彼らには外界に対する「独特の認知スタイル」があると考えている。

また、本研究では「バウムテスト」を用いる。バウムテストとは本来、心理的側面を把握するために用い、描かれた木には自己イメージが投影されていると考えられる。しかし、たとえそこに自己イメージが投影されていようと、描かれた「木」は、これまでの生活の中で体験的に知っている「木」から生み出されたものであるはずである。しかし、自閉症の人に認知障害があり、彼らが特有の認知スタイルを持っているのであれば、この「体験的に知る」というプロセスが自閉症ではない人と異なっている、と考えることができる。そこで筆者らは、バウムテストを描いてもらうことによって、自閉症の人が「木」をどう体験的に知っているのか、そのあり方(外界への認知スタイル)を明らかにし、その特性をとらえようと考えた。つまり本研究では、「バウムテスト」を、彼らの心理的側面を把握するためというよりも、彼らの外界への「認知スタイル」の特性を把握するために用いる。

ただし、浜谷・木原(1990)が指摘するように、描いてもらうものが人であるか物であるかでもその様相はだいぶ異なると思われる。その中で「木」とは、人物ほど動きがなく実践的関わりも求められないが、単なる物と違って無生物でもない。つまり中間的なものである。本研究で「木」を用いたのは、①この中間的な存在である「木」が、高機能広汎性発達障害児にとっては脅威的すぎず、かつ、生きているものとの関わりを意味し、外界において「ほどよい対象」を意味しているように思えたこと、②バウムテストに関して

は先行研究があり (原・中西, 2000, 中鹿, 2004), 本研究の結果が検証しやすいこと, ③被験者の負担が比較的軽いこと, といった理由による。ただし, バウムテストを用いた先行研究 (原・中西, 2000, 中鹿, 2004) では, 知的な遅れのある自閉症の成人を調査対象としているのに対し, 本研究は, 知的な遅れのない高機能広汎性発達障害の子どもを対象としているという点で違いがある。したがって, 本研究の結果と先行研究の結果を単純に比較することには慎重でなければならない。逆に言えば, 本研究のように, 高機能広汎性発達障害児のバウムテストの描画特徴を捉えようとした研究は今のところ見当たらない。本研究から得られた結果を第一歩として, 今後さらに詳細な調査研究を重ねていきたいと考えている。

IV. 調査

(1) 目的

高機能広汎性発達障害の子ども**のバウムテストの描画特徴を捉えることを通して, 彼らの外界への「認知スタイル」の特性を検討する。**その際, 先行研究で明らかになっている, 自閉症の人に特徴的な認知のあり方が本研究の結果からも見られるのかを検証し, さらに, 先行研究からは得られなかった新たな知見を探索的に調査したい。

(2) 方法

高機能広汎性発達障害の子どもが描いたバウムテスト15枚について, 描画テストに日頃から慣れ親しんでいる臨床心理士などの専門家10名が印象評定を行う。

① 対象者

(a) 対象児のプロフィール

対象児の年齢は7才~13才。男子14名, 女子1名。知能検査実施者については, 全員が知能指数75以上であり, 知的障害の基準 (IQ70以下) は満たさない。知能検査未実施者については, 全員が学校での学力遅滞は認められず, 知的水準は平均域と判断した。また障害の内訳については, アスペルガー症候群9名, 高機能自閉症3名, 特定不能の広汎性発達障害3名である。ただしその中の5名は, 医学的診断はついておらず, 心理臨床査定において広汎性発達障害であることが明らかに想定された子どもたちである (表1)。

表1 子どものプロフィール

描画No.	年齢	性別	知能指数	障害名	診断有無
①	12	男	76	高機能自閉症	有
②	8	男	未実施	アスペルガー症候群	無
③	13	男	101	アスペルガー症候群	有
④	7	男	110	アスペルガー症候群	有
⑤	10	男	112	アスペルガー症候群	有
⑥	12	男	未実施	広汎性発達障害	無

⑦	7	男	98	高機能自閉症	有
⑧	8	男	未実施	アスペルガー症候群	無
⑨	6	男	未実施	高機能自閉症	無
⑩	10	男	93	アスペルガー症候群	有
⑪	11	男	112	アスペルガー症候群	有
⑫	7	男	118	アスペルガー症候群	有
⑬	9	女	112	アスペルガー症候群	有
⑭	8	男	99	広汎性発達障害	有
⑮	10	男	未実施	広汎性発達障害	無

(b) 印象評定者のプロフィール

印象評定は臨床心理士9名 (内1名は小児科医でもある), 及び精神科医1名。各人の所属は, 精神科クリニック, 小児科・心療内科クリニック, スクールカウンセラー, 発達障害関係機関, 教育相談センター, 大学教員などさまざまだが, 全員が発達障害に関しての臨床経験を豊富に持つ。

② 手続き

バウムテストについては, 「一本の実のなる木を描いてください」の教示で実施。用紙はA4サイズの画用紙を縦に渡し, 鉛筆は4Bを用意した。

印象評定については, バウムテスト15枚の原本を見ながら, 「解釈ではなく描画の特筆すべき特徴とそこから受ける印象」について, ①全体的印象 ②部分的な印象 (見た場所を挙げて) の二つの観点から自由に記述してもらった。

③ データ整理

収集したデータをKJ法に基づき分類した。その結果, 11個の「着目点」(表2参照)と, 10個の「内容カテゴリー」(表3参照)に分類することができた。

これら11の「着目点」に対しての, 10のカテゴリーに分類された「内容」について印象評定をまとめ, バウムテスト15枚について評定者10名が記載した印象評定すべてをプロットした。そして, それぞれの「着目点」について, 多くの評定者が共通して指摘した描画特徴を抽出したところ, 資料1 (巻末参照) のような描画印象結果が得られた。

表2 印象評定着目点の分類

1	全体印象	
2	部分印象	樹冠
3		幹
4		枝
5		実
6		根
7		葉
8		付属物
9		地面
10		位置・大きさ
11		輪郭

表3 印象評定の内容カテゴリーー 表4 高機能広汎性発達障害の描画特徴

1	筆圧
2	大きさ・太さ
3	形態・表現
4	配置
5	規則性
6	バランス
7	イメージ
8	対称性
9	エネルギー
10	印象

全体印象	部分印象	
<ul style="list-style-type: none"> 木に見えない 各パーツが統合されていない 全体的なバランスの悪さ ステレオタイプ 細かい所と大ざっぱな点が混在 各パーツでの閉じた表現 上部と下部のアンバランス 自己肥大（インパクトが強い） ファンタジック 教示に従えない記載 	樹冠	圧迫感 雲形のおおざっぱな形
	幹	すじの表現・模様 棒状で下部が細い
	枝	枝先の曲がりくねったつ奇妙さ 枝が樹冠におさまらない
	実	○だけの実の表現 並び方の規則性
	根	透けて見える表現 根の先の奇妙さ
	葉	葉脈の細かい記載
	付属物	ファンタジックな表現

(3) 結果

資料1からさらに代表的な描画特徴を抽出するべく、より多くの評定者が指摘した項目を取り上げ（表4参照）、それらを高機能広汎性発達障害の子ども描画特徴と考えた。

(4) 考察

以上、高機能広汎性発達障害の子どもバウムテストにおける描画特徴について、印象評定に基づく分類を行った。ここでは、表4に示した高機能広汎性発達障害の子ども描画特徴について、先行研究を参照しながら考察を行う。

① 全体的印象

全体的印象については、まず、当初筆者らが感じていた「木に見えない」印象が非常に多く指摘されていた（例えば「図1」に対する印象評定）。高機能広汎性発達障害児が描くバウムテストは、「木」でありながら「木」に見えないのはなぜであろう。印象評定には、他に「各パーツが統合されていない」や「全体的なバランスの悪さ」などが多く指摘された。これらの結果から、「木」という形

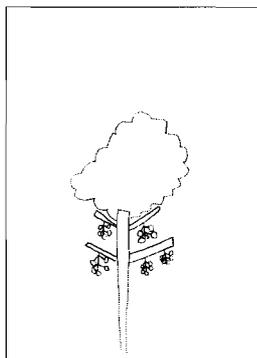


図1

全体に注目せず、部分に注目して各パーツを描き、それを組み合わせて「木」が出来上がっている、と考えることができる。部分は一つ一つの小さなまとまりであり、そのパーツが閉じた表現であればなおさら、小さい「部分」という単位でとらえてしまう。そしてその閉じた図形以外は別の図形であると認知してしまい、統合できなくなってしまうのである。これは、先行研究でも示されている、自閉症の人の細部への注目傾向や全体的な統合力の弱さに結びつく。中鹿（2005）も、バウムテストを用いた先行研究において本研究結果と

同様の結果を得ており、「中枢統合性の障害」（Frith, 1989）という観点から説明している。したがって、「木に見えない」ことの背景の一つには、彼らが全体構成を考えずに部分の細かい記載にこだわるため、描く「木」がどこか無機質で記号的な印象を与え、木に見えない印象につながっているということがあるだろう。このことは、ニキ・リンコ（2005）が「閉じた情報の環っか」という表現で、視野の狭さや細部への注目傾向、全体を見ることが苦手な様子を指摘していることとも重なる。

また、画用紙いっぱいの木や極端に太い幹などに対して、「自己肥大」という印象評定も非常に多く得られた（例えば、「図2」への印象評定）。これらの木は、確かに圧倒的な存在感があるが、「自己肥大」とは、本研究でのバウムテストが心理的側面を把握するためではなく、外界への認

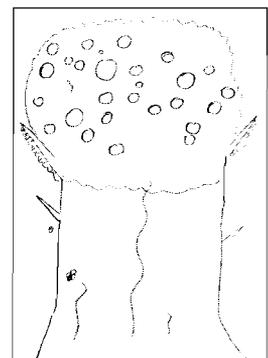


図2

知スタイルを把握するために用いているにも関わらず、彼らの「心理的側面」を表すものであるとも言える。そこで、まずは外界への「認知スタイル」という視点から「自己肥大」という印象評定を解釈し、その後、「心理的側面」についても言及する。

筆者らが、限られた一枚の紙の中でこのような圧倒的な存在感のある「木」を目にしてまず連想したのは、学級で高機能広汎性発達障害の子どもが、ときに他者の意向や感情を省みずに自身の考え方のみから突っ走って行動し、トラブルを引き起こしてしまう姿である。ここには、高機能広汎性発達障害をはじめとした自閉症の特性の一つである「社会性の問題」が感じられる。しかし、社会性の発達も個々の子どもの発達レベルによって異なり、他者が自分と違った考えを持っている

ことすら想像できない子もいれば、他者と自分に違いがあることは認識していても、他者の気持ちや場の雰囲気や適切に把握できない子もいる。高機能広汎性発達障害の子どもも成長に伴い社会性が徐々に発達してゆき、「心の理論」が獲得できていない段階では自己中心的な考え方に終始していた子どもも、徐々に社会性が発達するにしたがって、恥ずかしい気持ちや控えめな態度が育ち、周囲と折り合いをつけることができるようになる。おそらくその頃には、木の大きさにも変化が見られると思われる。

しかし注意しなければならないのは、高機能広汎性発達障害の子どもが周囲を客観的にとらえることができるような発達段階に入ったとき、彼らは、自分が周囲の人とはどこか異なっていると感じ始める、という点である。そのようなとき、彼らは非常に深い実存的孤独感に見舞われ、二次的な心理的問題が引き起こされることも多い。このような二次的な心理的問題を成人してから引きずり、より重篤な精神障害につながることもある。後藤 (2005) は、アスペルガー症候群の子どもが自己確認できる場を設定することの大切さを指摘している。筆者らの印象としても、前思春期や思春期に入る頃にこのような問題にぶつかる子どもが多く、彼らが自分らしく居る場所を確保していくことの重要性を感じる。したがって、「自己肥大」を感じさせる木が、本当に社会性の未熟さから来ているものなのか、自己を確認することができず、実存的な孤独感に見舞われていることの裏返しなのかを見定めることは大変重要である。これは次に指摘する「ファンタジック」という印象評定にも重なるが、本研究において「自己肥大」という印象のあった木は、併せて「ファンタジック」という印象も持たれやすい傾向があった。つまり、本当は自己不全感が強く、現実に根ざすことができないゆえに、「自己肥大」的かつ「ファンタジック」な木を描いたと考えることもできるのである。このような解釈が「心理的側面」からの把握になるのだが、「自己肥大」や「ファンタジック」という印象のある木を高機能広汎性発達障害の子どもが描いた場合には、彼らの社会性のレベルを「心の理論」などから把握すると同時に、彼らの「心理的側面」をも共感的に理解し、その両方のアセスメントに基づき、どのような心理的援助がふさわしいのかを適切に判断しなければならない。

最後に、「ファンタジック」という印象評定も比較的多く得られた。これは先に述べたように、一つには、この現実社会の中で自己を確認・確立することができないことの表われと捉えることもできるであろう。杉山 (2005) は高機能広汎性発達障害の子ども臨床的経過として、学童期におけるファンタジーへの没頭をあげている。妄想とも間違えられるような強いファンタジーへの没頭傾向は、当然、描画表現にも影響を及

ぼすであろう。しかし、なぜ学童期にファンタジーへの没頭傾向が見られるのであろうか。その点については明らかではないし、さらに、高機能広汎性発達障害の子どもは「視覚で考える人 (Visual Thinker)」という認知特性がある (杉山, 2002) と言われているにもかかわらず、見たものを見たままに描くのではなく、空想的な絵を描くのはなぜなのだろうか。「ファンタジック」という印象評定は、先行研究で得られている、自閉症の人の認知特性に関する知見からはややずれる結果とも思われる。これについては、今後さらに調査及び検討を重ねたいと思う。

一方、ファンタジックな「木」の中には、付属物の

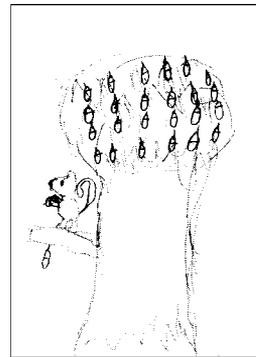


図 3

記載が多く見られるという傾向があった (図 3 参照)。リスであり虫であり、鳥である。いずれも生き物が多いのが印象的であった。これらの付属物の記載は、「一本の実のなる木を描きなさい」という教示の枠からは外れており、検査者への同意なく描かれたものばかりである。教示の枠の中

でおさまりきらない自己イメージ表出は、社会性基準の未獲得や自分の気持ちがうまく抑えられない感情コントロールの苦手さなど、高機能広汎性発達障害の子どもの障害特徴と重なる面がある。このことも、先に述べたような「社会性の発達段階」と「自己確立の問題」という二つの相関から考えていく、というのが適切に思われる。

② 部分印象

部分印象については、特に「樹冠」「幹」「枝」「実」「根」「葉」「付属物」のそれぞれの部分について、多くの描画に共通した結果が得られた。

まず「樹冠」は、幹とつながりのない雲球型の樹冠がただ幹の上に乗っているという印象評定が多く見られた (図 4 参照)。本や絵本で見られるような簡略化したステレオタイプの木の樹冠である。後でも述べるが、枝や葉はとても細かい描写をしているのに対して、あまりにもあっさりした印象がある。しかし自閉症の人が視覚優位で、見えない物をとらえるのが苦手であることを考えると、樹冠は

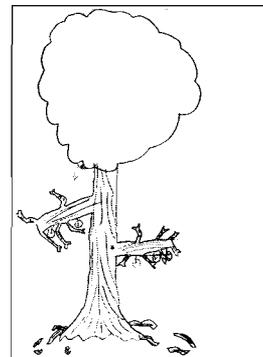


図 4

視覚的にとらえにくい部分ではないだろうか。そのためイメージのしにくさがあり、本や絵本で見かけるようなステレオタイプの形の表現になったのではないだ

ろうか。その他にも「下から木を見上げたような描画」とか、「幹より下の表現が大変精緻なのに対して樹冠だけが簡素という、上下のアンバランスさ」という印象評定も多く見られたが、これらも、見たものを見たままに描く自閉症の人らしい特性だと考えることができる。

次に「幹」だが、その太さについては全体印象で指摘したように、自己中心的世界観、あるいは、自己確立できていないことの裏返しとしての自己肥大を表しているのかもしれない。またその一方で、極端に細い幹や下方部が細くなった幹を描くものもあり(図1参照)、幹の形態は閉じた表現や切断された切り口の表現が多かった。これも中鹿(2004)の研究結果を支持するものであり、部分認知を組み合わせることで全体像を作るというやり方である。また興味深いものとして、幹の「すじ」が多く見られた(図4参照)。これを心理的側面から見ると「心的外傷」と捉えることが妥当だが、高機能広汎性発達障害の子どもの表現は「傷」と言うよりも「模様」のようにとらえている印象がある。ニキ・リンコ(2005)は「虫瞰図」という表現で部分への視覚的な注目傾向を紹介しているが、幹の「すじ」の記載は、目に見えているものを細かく記載する自閉症の傾向と考えることができるのではないだろうか。

次に「枝」であるが、枝には独特な印象を受ける描画表現が多く、特に、「細かく精緻な表現」という印象評定を挙げた人が多かった(図5参照)。幹や樹冠の大雑把な表現に対して、曲がりくねった数多くの枝や先のとがった枝など、実物の木の枝の複雑さを視覚的に記憶していて、それを忠実に見た通りに描こうとしたかのように感じられる。つまり、「映像的記憶(杉山, 2002)」によって忠実に細部を表現していると考えられる。また、枝が樹冠の中に納まっていない木も多く、樹冠の中に入った枝は目に見えないゆえ、視覚的に認知できる「樹冠の外にある枝」だけを表現したのではないだろうか。

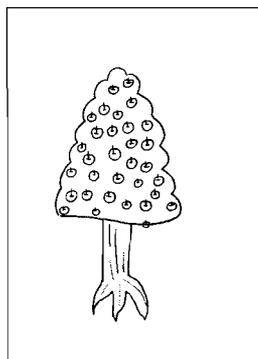


図6

「実」については、りんごの実を想像して描いたかのような、ステレオタイプな印象を持つ人が多かった(図6参照)。具体的な実をイメージせず、ただ単に「○」だけの表現も見られた。「何の木」なのかをイメージせずに、「○」というパーツの組合せだけに終

わっており、かつ、たくさんの「○」が規則的(強迫的)に描かれ、自閉症の人の特徴である「細部への注目」や「こだわり傾向」も感じられた。

「根」については、様々な印象評定が得られたが、特に興味深かったのは、土から外に出ている部分だけが描写されている点に注目する人が多かったことである(図4参照)。このような根も、見えないものは描けず見えるものだけを見たままに描いている自閉症の人の認知特徴を反映しているのだろう。

「葉」については、一枚ずつ葉脈までを細かく記載している点を印象評定にあげる人が多く(図5参照)、確かに、まるで観察して描かれたかのような葉が見られた。

最後に、「付属物」については全体印象でも述べたとおり、虫やリス、鳥などファンタジーの世界が丁寧に描かれており(図7参照)、その丁寧さを指摘する声が多かった。

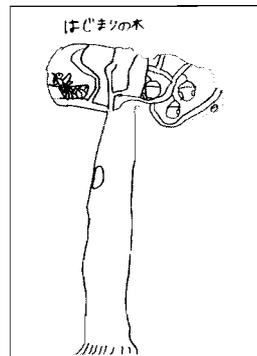


図7

V. 総合的考察及び今後の課題

IV章で考察したことをさらにまとめてみると、以下の4点になる。

- ①自閉症の人の認知特性として、部分認知が得意であるが、部分を統合することが苦手である。そのため各部分の描写の精緻さが目立ち、まるで観察して描いているかのような絵(例えば、葉脈まで描かれた葉っぱなど)がある一方、部分間のつながりがないため、木全体としてはアンバランスになり、「木に見えない」印象に結びつくことができる。これは中鹿(2004)の研究結果とも重なり、「中枢統合性理論」から説明できるが、さらに、視点を変えて全体を構成することのできない「実行(遂行)機能障害」の観点からも説明することができるだろう。
- ②自閉症の人は「視覚で思考する人(visual thinker)」である。実際に見えていないものをイメージする力は弱い。これは自閉症の人の「想像力の障害」にもつながる。そのため、本や絵本で見かける一般的な「木」の典型例を再現したり、馴染みのない部分についてはステレオタイプな表現になったりすると考えられるのではないだろうか。
- ③ファンタジックな表現は、「心の理論」課題で見られる社会性基準のずれや自己中心的な在り方が大きく影響していると思われるが、ある程度社会性が発達した段階であれば、彼らの心理的側面の問題として、自己確立のできなさや自己不全感の裏返しと考えることもできる。そして、見たものを見たままに描くことの多い自閉症の人が、なぜ非常にファンタジックな木を

描くのかについては、今後さらに調査および検討が必要である。

④実や葉の数の多さや規則的な配置や記載から、自閉症の特徴である「同一性保持傾向（こだわり）」が感じられる。

本研究から得られた、高機能広汎性発達障害の子どもの外界への「認知スタイル」の特性のほとんどは、中鹿（2004）の研究をはじめとした先行研究の結果を裏付けるものとなった。つまり、部分認知が優位であり、目で見ることのできる場所だけを丁寧に、まるで観察したかのように描くが、それらを統合して全体像とする際に、「部分」という部品を組み立てて「全体」を作り上げるので、全体像がアンバランスになるという結果である。高機能広汎性発達障害の子どもがこのように外界を認識しているのであれば、人間を理解したり、変わりやすい日常生活の流れを捉えたりすることが困難であることは想像に難くない。「木」を描くだけならまだしも、人間を理解する時に、「部分の総和は全体である」というやり方で応じているのは、状況によって刻々と変わる人の表情や対人関係の在り方を把握することはできないであろう。

また、ファンタジックな木が多く見られたという結果については、先行研究からは裏づけが難しく、この点についてはさらなる研究が必要と思われる。おそらく、本研究の調査対象者が高機能広汎性発達障害の子どもであり、それゆえにファンタジックな木が多く描かれたのではないかと推測される。したがって今後は、個々の子どもの社会性の発達段階及び、認知的側面についても知能検査などでその発達レベルをとらえ、それらと照らし合わせながらファンタジックな木の意味をアセスメントし、多角的に検討する必要があるだろう。子どもを対象とする場合、子どもの発達レベル（単にIQという意味だけではなく、認知面や言語面などのより詳しい発達の様相）を考慮に入れることが大切である。

最後に、今回明らかになった描画特徴をもとに、今後は健常児と高機能広汎性発達障害児を比較して数量的調査を行い、今回あげた描画表現が統計的に有意であるのかどうかを検証していく必要もあるだろう。

VI. 終わりに

本研究では、高機能広汎性発達障害児の外界への「認知のスタイル」の特性をとらえる試みを行った。本研究の結果を基礎として、今後さらなる検討を重ねていきたい。

<付記> 本論文に描画を掲載することを快諾して下さったクライアント及びご家族の方々に深謝いたします。また、論文執筆にあたり多大なるご指導をいただいた高橋昌久院長（こどもクリニック・パソ）に謝意を表します。

文献

- Alvarez,A. (1999):*Autism and Personality*. 倉光修監修. 鶴飼奈津子・廣澤愛子・若佐美奈子訳. (2006):自閉症とパーソナリティ. 創元社.87-110.
- Baron-Cohen,S.,Leslie,A.M.,&Frith,U. (1985):*Does the autistic Child have a 'theory of mind?'* *Cognition*,21.37-46.
- Carol Gray (2000):*The New Social Story Book*. 服巻智子監訳 (2005):ソーシャルストーリーブック. クリエイツかもめ.
- 原幸一・中西恵美子 (2000):知的障害をもつ自閉症者のバウムテスト. *心理臨床学研究*18 (4).390-395.
- 浜谷直人・木原久美子 (1990):自閉症児の特異な描画技法の発達過程. *教育心理学研究*38 (1).83-88.
- 近藤智栄実 (2003):アスペルガー障害児の人物画の発達—さとし(仮名)の場合. *臨床描画研究*18. 北大路書房.173-195.
- 小林隆児 (2000):自閉症の関係障害臨床. ミネルヴァ書房.
- 松瀬留美子 (2002):自閉症の描画における表出援助. *臨床描画研究*17. 北大路書房.136-146.
- 中根晃 (1999):自閉症とイデオ・サバン. *発達障害の臨床*. 金剛出版.91-100.
- 中鹿彰 (2004):バウムテストから見た広汎性発達障害の認知特徴. *心理臨床学研究*.21 (6).611-620.
- ニキ・リンコ (2005):俺ルール!. 花風社.
- ニキ・リンコ (2005):自閉っ子, こういう風にできてます!. ニキ・リンコ・藤家寛子著. 花風社.
- 太田昌孝 (2003):認知発達プログラムから. *そだちの科学1 自閉症とともに生きる*. 滝川一廣・小林隆児・杉山登志郎・青木省三編. 日本評論社.59-65.
- Ozonoff,S.,et al. (1991):*Executive function deficits in high-functioning autistic children:relationship to theory of mind*. *Journal of child psychology and psychiatry* 32.1081-106.
- Richman,S. (2001):*Raising a child with Autism*. 井上雅彦・奥田健次監訳 (2003):自閉症へのABA入門. 東京書籍.
- 佐々木正美 (2003):TEACCHプログラムから. *そだちの科学1 自閉症とともに生きる*. 滝川一廣・小林隆児・杉山登志郎・青木省三編. 日本評論社.53-58.
- 杉山登志郎 (1997):千数百枚の連続画に描かれた幼稚園のある一日. 太田昌孝編. *こころの科学*73. 日本評論社.94-110.
- 杉山登志郎 (2002):発達障害の臨床における描画の意味—自閉症の描画を中心に. *臨床描画研究*17.22-36.
- 杉山登志郎 (2005):アスペルガー症候群の現在. *そだちの科学5 アスペルガー症候群*. 日本評論社.9-21.
- 高田博行 (2003):行動療法の立場から. *そだちの科学1 自閉症とともに生きる*. 滝川一廣・小林隆児・杉

- 山登志郎・青木省三編. 日本評論社.66-71.
- 寺山千代子 (2002):自閉症児・者の描画活動とその表現. 臨床描画研究17. 北大路書房.5-21.
- Frith,U. (1989):*Autism:Explaining the Enigma*. Oxford:Blackwell. 富田真紀・清水康夫訳 (1991): 自閉症の謎を解き明かす. 東京書籍.
- 十一元三 (2001):発達障害と脳. 心の科学100脳とこころ. 風祭元・岡崎祐士・青木省三・宮岡等編. 日本評論社.78-87.
- 十一元三 (2003):自閉症の治療・療育研究最前線. そだちの科学 1 自閉症とともに生きる. 滝川一廣・小林隆児・杉山登志郎・青木省三編. 日本評論社.17-26.
- Wing,L (1979):*Differentiation of retardation and autism from specific communication disorders*. *Child:Care, Health&Perelopment*,1,57-68

資料1 高機能広汎性発達障害の描画特徴

着目点	内 容	描 画 特 徴
全体印象 1	1 筆圧	筆圧強い 曲がりくねったライン
	2 大きさ 太さ	木がどっしりしている 画用紙いっぱいの木
	3 形態	地面に潜って出てくる根 幹が閉じて樹冠とつながっていない 幹や根が閉じている 枝と葉が細部まで描かれている 幾何学的な木 幹に比べて枝、実の細かい記載 透けて見える 木全体が曲がりくねっている
	4 配置	樹冠の中に枝がない, 外から枝が伸びる 統合性のなさ, 各部がつながっていない 下から見上げた絵
	5 規則性	規則的, 強迫的 実がいっぱい
	6 バランス	幹と樹冠のアンバランス バランスの悪さ, 非統合性 枝, 葉の細かい描写と幹のギャップ 幹, 枝, 実, 根全体のアンバランス
	7 イメージ	人のような木 記号か標識のよう 左右対称 ファンタジックな木 木に見えない
	8 対称性	ステレオタイプ 左右対称
	10 印象	奇妙 寂しい 自己肥大
	部分印象 2 樹冠	3 形態
4 配置		樹冠の中に枝がない 幹の上に丸が乗っている感じ 境界が明確
5 規則性		実がたくさん 丸い実が同じパターンで
6 バランス		バランスが悪い
7 イメージ		生きた木という印象がない (実も葉もない) 実がなく空虚

部分印象 3 幹	2 大きさ 太さ	太い
	3 形態	何本かのスジ, 模様がある 幹と樹冠の境目に線がある 上端閉じている 下が細い, 上が太い 樹冠のくい込み, 切断された切り口
	5 規則性	実がたくさんくっついている
	6 バランス	上下のバランスの悪さ
	7 イメージ	電柱のよう
	8 対称性	ステレオタイプ 左右対称
	9 エネルギー	どっしりした
部分印象 4 枝	3 形態	先がとがっている 葉の細かい記載と丸のギャップ ステレオタイプな葉と枝 樹冠の粗雑さと枝の丁寧さのギャップ くねくね曲がった奇妙さ 樹冠の中に収まらない
	4 配置	左右の枝の位置が唐突 すべて下方に垂れ下がる
	5 規則性	数が多く, こだわりがある
	7 イメージ	手のよう
	10 印象	細い枝の不気味さ
部分印象 5 実	3 形態	写實的 緻密 ステレオタイプ 記号的
	4 配置	下向きについている
	5 規則性	実の数が多い 同じように並んでいる
	6 バランス	樹冠の中に大小バラバラ
	7 イメージ	機械的な 実らしくない
	9 エネルギー	しっかりした
部分印象 6 根	3 形態	根元が台形 曲がりくねっている
	4 配置	幹と地平と根が切断 地上の木とのつながりない
部分印象 7 葉	3 形態	ステレオタイプな葉と実 葉がなく枝に直接実がつく
	5 規則性	細かい描写 葉脈を無視できない 羅列的
	7 イメージ	几帳面な
	10 印象	気持ち悪さ
部分印象 8 付属物	3 形態	小さな虫, 花
	7 イメージ	細かいところはよく見ている リス, 鳥 (空想的), 虫
部分印象 9 地面	4 配置	すばっと紙を切っている
部分印象 10 輪郭	1 筆圧	くっきり内と外がわかれている